

**第3回北海道集落総合対策事業幌加内町（母子里地区）地域協議会
母子里地区地域づくり協議会（議事要旨）**

■開催日時

平成26年1月28日（火） 18:00～20:00

■開催場所

幌加内町母子里コミュニティセンター研修室

■出席委員等

<委員>

多田会長、橋本委員、日野委員、若山委員、渡来委員、岡本委員、小野田委員

<アドバイザー>

北大雨龍研究林 吉田林長

旭川大学保健福祉学部 大野准教授

NPO法人「よるべさ」 蔵前理事

<事務局(北海道)>

総合政策部地域づくり支援局地域政策課

西田主幹、田中主査

上川総合振興局地域政策部地域政策課

大西主任

■開催概要

1 挨拶

多田会長：本日はご多忙のところ、また、悪天候のなか、お集まりいただき感謝申し上げます。今年は寒い冬でマイナス30度を下回る日が多くなっているほか、雪も非常に多く降っている。この母子里地区の将来を考えて行く上では、寒さと雪の問題は避けて通れない課題である。今年の除雪は、本日もお越しいただいている橋本さんと若山さんをお願いしているが、いつまでもということにもならない。この先、地域の除雪にどのように対処していくかといった問題についても真剣に考えていく必要がある。こうした身近な問題なども念頭に置きながら、本日は、この母子里地区の将来について、色々ご議論いただければありがたい。

2 議事

(1) 経過報告について

※西田主幹より、これまでの主な意見について資料1に沿って説明

(2) 母子里地区の将来に向けて

※西田主幹より、母子里地区の将来に向けて（まとめのイメージ）について資料2に沿って説明

<意見交換>

多田会長：この母子里地区の将来について、各委員の皆様からざっくばらんにご意見をいただきたいが、ただ今の説明にもあったとおり、一筋縄ではいかない難しい問題も多くある。各委員の皆様から率直なご意見などをお聞きしたい。

日野委員：取組を進めるに当たって、この母子里地区で具体的に何をするのかをしっかりと話し合っていく必要がある。10年後に、この母子里地区では、若い世代の人口が減り、高齢化がさらに進むなど、かなり厳しい状況になることが想定される。現状で既に母子里地区を離れていく可能性のある世帯もあり、こうした方々を引き留めるためにも、地域資源などを活用しながら、雇用の場を確保していくことも考えていく必要がある。旭川大学の調査報告でも、働きたいと考えている方が9名ほどいるなど、仕事を求めている方も相当数いる。北大にお願いしたいが、山林資源を活用した雇用の場を創出し、若い世代が定住できるような環境を作ってほしい。また、若い世代が定住するための条件として、教育環境を整えていくことも考えていく必要がある。

多田会長：ただ今のお話であるが、当面の課題としては、雇用の場の確保など、若い世代に移り住んでもらう、定住してもらうための取組が必要ではないかといったご意見であったと理解する。教育環境などのお話をあったが、この母子里地区に移り住んでいただくにしても、できれば若い世代、子どものいる世帯のほうが良いし、こうした方々が何らかの形で仕事を持って暮らしていける環境を作っていくべきではないかのご意見であったかと思う。そのためには具体的にどういった取組が必要なのか、本日は、この辺のところを少し踏み込んで考えていきたい。

小野田委員：日野委員より北大の山林資源を活かしたビジネス化のお話があったが、非常に現実的なご意見であったように思う。山林資源の活用については過去にも話題に上がったことがある。実際には北大としっかりと協議していかなければならないが、山菜等の加工品を作るなど地域資源を活用しながら雇用の場を創出していくという取組は、十分に検討の余地があるように思う。

多田会長：吉田林長にお聞きしたいが、例えば、この母子里地区にNPO法人などを立ち上げ、山菜等の加工品を製造・販売するとした場合、北大のご協力は可能か。

吉田林長：営利団体であれば難しい。地域の発展や地域おこしの観点で必要な取組であると位置づけられれば、範囲は限定されるが協力できる部分もあると思う。

若山委員：この母子里地区に人を呼び込むにしても、何か事業に取り組むとした場合、必ず組織が必要となるが、現在、この母子里地区に住んでいる住民だけで対応するのは相当難しい。現実的には役場や農協、北大などの外部の協力を前提としながら進めざるを得ないが、どうしてもこの母子里地区の住民のどなたかが関わらなければならない。率直なところ、自治区の役員ですらなり手がいない現状の中で、正直、この大変な仕事を本当に上手くやっていけるのか疑問である。まずはこの母子里地区の維持について考えていくべきであり、その先に、余力があれば、何かの事業に取り組むといった方向が良いのではないかと考える。事業に取り組むことに反対ではないが、まずは現実的なことから考え、段階的に進めていくほうが良いと思う。先ほど、働きたいと考えている方が相当数いるとのお話があったが、自治区の中の仕事ですら、なかなかやり手がいないのが現状である。現実的には加工品を作る作業よりも、その加工品を売るといった作業のほうが、数倍大変である。

多田会長：若山委員のご意見は理解できるが、あまり深く考えないで、とりあえずやってみようといったスタンスでも良いと思うがどうか。販売についても、まずは規模を小さくし、ネット販売でも良い。採算面を考えても、最初はそれほど大きな収益は望めないが、まずは何かに取り組んでみる事が大切であるように思う。母子里地区に住んでいる住民での対応が難しいのであれば、地域おこし協力隊員などを呼んで、事業として成り立つのか探ってもらうのも良いかと思う。

若山委員：取組を始めることについては反対ではない。まずは、できることから行動を起こすことが大切であることは理解する。ただ、この母子里地区に住んでいる方々を考えたとき、何かの事業に取り組むことも重要であるが、もっと先に取り組むべきことがあるように思う。例えば、地域おこし協力隊を活用するにしても何をどのように取り組むのか、具体的なものが決まっていなくて上手くいかないように思う。

多田会長：地域おこし協力隊を活用して何に取り組んでいくのか、これについてもう少し具体的な話を進めてみたい。例えば、山菜ビジネスについて探ってもらっても良いかと思う。若山委員のお話にもあったとおり、具体的なものが決まっていなくてなかなか難しいが、まずは制度上の期限である3年間はこれに取り組んでもらい、その後の定住についても同時に考えていくのも良いかと思う。

日野委員：地域おこし協力隊の取組としては、下川町の取組が有名であるが、この母子里地区でも取り組むべきである。まずは、この母子里地区に住んでもらって、しっかりとコミュニケーションをとりながら、若い世代の定住化を図っていくことが大切である。ただ、若山委員のお話にもあったとおり、何をねらいにするのかをきちんと考えていくことも必要である。この母子里地区では、山菜以外にも笹なども有名である。

橋本委員：若山委員のお話にもあったとおり、山菜ビジネスに取り組むにしても、この母子里地区で組織を作ってやっていくのは相当難しいと思う。本当にビジネスとして成り立てば良いが、自治区の活動で言えば、10年後どころか、すぐにでも大変な状況がやってくると思う。仕事がしっかりと確保されていなければ暮らしていけない。ここで暮らしたくても暮らしていけないのが現実である。基本的には仕事をしっかりと確保していくのが一番大事であると思う。

多田会長：何に取り組むにしても資金と人材が必要である。人材の面だけみても、現実的に母子里地区の住民だけではかなり難しいのは明らかである。

若山委員：仕事が無いと人が来ないという認識は、少し違うように思うがどうか。例えば、ホームページなどで母子里の良さをもっとアピールして、この土地に暮らしてみませんか？と、広くPRしてみるのも良いかと思う。この母子里地区の良いところを理解した上で、移住してくる方も増えてくるのではないか。

日野委員：移住者を呼び込むといった考えもあるが、離れて暮らしている家族が戻ってきてやすいような環境を作っていくことも大切ではないか。ただ、若山委員のお話にあったとおり、メディアなどを通じて移住者を呼び込んでいこうという考えは同感である。

蔵前代表：仕事が無いと人が来ないのお話があったが、我々の「よるべさ」では、仕事はいつでもあるが人が来ないのが現状である。ホームページなどでも、常時募集している。また、実際に人が来たときを考えてみた場合、母子里地区でもそうであるが、朱鞠内地区では住むところが無い状況である。人口の減少に比例するように空き家となる家屋が生じるが、雪による倒壊や景観の問題などにより、ほとんど解体されている。先日、鹿児島県の「やねだん」の取組を視察する機会があったが、ここでは、空き家となった家屋を地域の方々が管理し、移住者などに貸し付け、元の家主や家族などが墓参りなどで地域に戻ったときに寝泊まりできるような取組をしている。北海道との文化の違いもあるが、非常に印象深い取組であった。先ほどのお話にもあったが、この母子里地区で仕事をしたいと考えている方が相当数いるとのことであったが、例えば、ボランティア活動などでも関わりを持っていただければ非常に良いと思う。

大野准教授：この母子里地区の維持・活性化を考えていく上で、4点ほどの軸が考えられる。まず1点目は、「集落の維持」の方法を考え実践していくことである。これは、高齢者支援、雇用の確保など様々な生活課題を解決していくことで生活共同体としてのコミュニティの機能を維持していくことである。2点目は、「今現在、地区に住んでいる方々を、これ以上減らさないような取組」をしていくことである。3点目は、「外部資源・組織の活用による集落活性化の方法を考え、実践していく」ことである。これは、北大研究林職員など外部の方々と関わり持ち昼間人

口を上手く活用していくことや、NPO 法人よるべさとの連携を図ることで自治区の生活支援ネットワークを手厚くしていくこと、さらに、北大や旭川大学等自治区と多様な主体との連携を図り、自治区活動を維持しつつ活性化に向けた取組を考えていくことである。最後に4点目は、こうした外部の方々との関わりを上手く機能させながら「移住者を増やしていくこと」が必要である。

多田会長：大野准教授からお話のあった4点については、それぞれしっかりと検討していかなければならない事柄でもあり、また、これらの点を有機的に連動させていくことも非常に重要である。

渡来委員：現在は除雪や水道の管理などを自治区で担っているが、このペースで人口が減り続ければ、現実的に自治区での管理は難しくなるので、外部に頼ることの善し悪しはあるにしても、将来的には業者などに頼まざるを得ない状況も想定されるところ。毎日の除雪は大変であるが、この雪をもっと良い方向にアピールしてみてもどうか。

小野田委員：同感である。2月17日はマイナス41.2度の記念日として、この母子里地区ならではのイベント「天使の囁き」があるが、この時期になると、今でも問い合わせがある。この母子里地区の貴重な地域資源として、地域の方々の勲章であると思う。こうした取組をもっとアピールできれば、この母子里地区の良さを理解して、移住したいと考える方も出てくるのではないかと思う。現在は有志による実行委員会で開催しているが、この「天使の囁き」は貴重なイベントとして、今後も大切にしていきたい。

橋本委員：「天使の囁き」も事業として成り立てば良いが現実的には難しい。移住者を呼び込むといった観点では、この母子里地区に住めばこういう特典があるといったものも必要ではないか。役場の協力も必要になるが、何かしらの補助を出すなど、移住者への支援が必要ではないか。

若山委員：移住者への補助なども必要ではあるが、まずは移住者に対する役場の考え方である。幌加内町はあまり積極的ではないように思われる。他の市町村などでは、公営住宅を活用した「ちょっと暮らし」であるとか、役場が中心となって積極的にPR活動を行っている。

小野田委員：移住施策では、近隣の下川町や秩父別町などが積極的に取り組んでいるが、幌加内町ではあまり積極的ではないのが現状である。先ほど話題になったが、空き家などの状況を踏まえた場合、具体的な対応として、リフォームするのか、解体するのか、本来であればセットで考えていかなければならない問題であるが、役場の現状としては、それぞれ別の部署で対応しているのが現状である。

多田会長：空き家の活用もそうであるが、こうした地域の資源を如何に上手く活用していくかが大切である。山菜の話に戻るが、この母子里地区の貴重な地域資源であるとする。例えば、行者にんにくなどは、他の地域であれば、かなり山の中に入り、斜面に沿って生えているが、この母子里地区では、それほど山の中に入らずとも、平地に生えているなど、条件が非常に良い。

渡来委員：山菜は採るのが楽しい。この母子里地区に住んでいる人で、スーパーなどで買って食べた話などは聞いたことがない。ただ、山菜の加工品を作って販売していくとなると問題も多いのではないかと思う。

多田会長：「行者にんにく狩り園」などの取組もおもしろい。山菜の資源管理など難しい面はあるが上手くいく可能性はあると思う。タケノコも結構良いものが採れる。栽培するのではなく、自然の流れの中で上手に資源を管理していければ、天然の良質の山菜を提供することができる。

若山委員：山菜を採って販売するのも発想としては良いが、別の観点では、ガイドなど北大の協力を得るなどして、この母子里地区の山々を案内するフィールド散策などの取組もおもしろい。実際に山菜を本人に採ってもらって楽しんでもらうことにより、若い世代の方々にもレジャー感覚で来てもらえるきっかけになるのではないか。今の山菜採りは圧倒的に高齢者の方が多いので、若い世代の方々にも山菜採りの楽しさを伝えていくのもおもしろい。

多田会長：山菜のよく採れる場所などは、個々人でもっている貴重な情報でもあり、意外と扱いがデリケートな問題である。また、一度に多くの山菜を採ってしまうと資源が枯渇してしまうことも危惧されるところ。

若山委員：採る場所を限定したり、採る日を土日に限定したり、ある程度の工夫を施せば、受け入れる人数や採る量も限られるので、特に問題は無いのではないか。ねらいとするところは、山菜だけではなく、植物や動物などを含め、この母子里地区の自然に触れ、散策する機会を提供するということである。

吉田林長：タケノコに関しては、既に一般開放している。個人での開放はなかなか難しいが、先ほどご説明したとおり、地域の発展や地域おこしの観点で必要な取組であると位置づけられれば、範囲は限定されるが協力できる部分もある。イベントなど、観光というキーワードでの関わりであれば、この母子里地区でしかない貴重な資源も多くあるので、研究林として協力できる部分も少なくない。散策のガイドなどの協力についても、長期間になると難しいが、短期間であれば協力は可能であると思う。

若山委員：「田舎暮らし」は、特に女性のほうが関心があるように思われる。現在、旭川大学との関係が深いのが、保健福祉学部の学生などが「よるべさ」の活動に体験学習として参加する機会を設けることはできないか。将来的な人材の確保に繋がると思う。

蔵前代表：非常にありがたいお話である。一度、こちらに来て、実際に体験していただくと、この母子里地区の良さを実感していただけると思う。

多田会長：議論も尽きないところであるが、そろそろ本日のまとめに入りたい。先ほど、大野准教授より、母子里地区の将来を考えていく上でのポイントを4点ほど示された。まず1点目は、コミュニティの維持や高齢者支援、雇用の確保など様々な生活課題を解決していくことが必要であるということ。2点目は、今現在、この母子里地区に住んでいる方々を、これ以上減らさないような取組が必要であるということ。3点目は、北大研究林職員など外部の方々と深く関わり持ち、昼間人口を上手く活用していくなど、外部の人を呼び込んでいくことが必要であるということ。最後に4点目は、こうした外部の方々との関わりを上手く機能させながら移住者を増やしていくことが必要であるということであった。各委員におかれては、本日の議論などを踏まえながら、次回の協議会までに、それぞれ意見をまとめてくるということにしたいがどうか。

西田主幹：各委員にご異議がなければ、めざす姿や今後の取組の方向性など必要項目を事務局で整理のうえ、各委員に意見照会をさせていただく。

多田会長：最後に、朱鞠内湖で漁業（ワカサギ漁）を営んでいる方から現在の状況をお聞きしてきたので、その内容をここで紹介する。ワカサギ漁自体は定置網漁で収穫したワカサギを佃煮にして販売しており、ひと冬で150万円ほどの所得を得ているとのことであった。現在、朱鞠内で漁業を営んでいる方は北部で2名ほどである。また、初期投資では、定置網で70万円ほどのものを2セット、エビのカゴ網で20万円ほどのものを3セット、船とエンジンで70万円ほどとのことであった。

小野田委員：幌加内町の制度であるが、現在、「企業立地」に関する助成制度がある。ソバの加工施設などでは、施設を整備し、初期の運転資金まで賄っている事業者もいる。こうした制度もあるので、積極的に活用していただきたい。

※小野田委員より、2月22日開催のイベント「天使の囁き」について紹介

多田会長：各委員より特にご発言がなければ、本日の協議会をこれで終了したい。

～ 閉 会 ～